

小説 竹内けん

挿絵 218 / Hiviki N



# ハーレム *Harem Take* フェイト

立ち読み版

# ハーレムシリーズの世界





● グリンカムビ  
ナウシアカ

● フェンリル

**ターキア山脈**

● ベリーシャム

サイアリーズ

フレイア

シウルビー

● カブス

● エバーグリーン

エクスター

● ラグナイト

セルベリア

ザウルステール

● レヴィ

● ライオネル

**クラナ**

カーリング

● ガラティア

バロムリスト

ニーテンベルグ

フルセン

● アヴァロン

● ビーナス

メリシャント

**樹海**

**オルシ**

● エレオノーラ

クレオンレーゼ

ペルセボネ

シエルファニール

イシュタール

● セビュロア

● シェンロン

**西海航路**

ダリシン

モンテルナモ

● マリア

ランチェロ

ローランス

● ラリマル

● マルタ

カルロッタ

# 登場人物紹介

## セルシオーネ

騎士道を重んじるサラミス  
領主の武の柱。  
処刑直前のウッドを領主の  
影武者にするために救った。



## カメリア

老舗旅館の娘。街では  
美少女として有名で名  
門ホワイトホースに在  
学していたことも。

ハレルマ  
シェン  
フェイス

## マルガリータ

ギャンブレルの娘でダードリーの許嫁。  
姉御肌でカリスマがある。

## フィナンシェ

メイド長で未亡人。  
命令で城内では常に裸エアロン姿。

## ウッド

日雇いの仕事で食いつなぐ若者。  
先日母が他界、天涯孤独の自由人になった。

## イーシャ

元々は仕立て屋の娘だった。  
気取らず遅しい性格。

第一章 路傍の人

第二章 自分にしかできない仕事

第三章 入れ替わり遊び

第四章 元の木阿弥

第五章 魔姫降臨

第六章 偽を以て真と成す

ハーレムキャッツスル外伝 側室希望の少女

009

044

087

124

167

203

245



「う、うん……」

これは明日死ぬことになったウッドに対する手向けということだろうか。

戸惑いながらもレイピアを受け取る。

「刀身に接吻してから、献者の肩を軽く叩き、それから返す」

「……こう？」

周りの重臣に言われた通り刀身に接吻して、跪くセルシオーネの左肩を軽く叩いてから、両手に持って返した。

「ありがとうございます」

両手でレイピアを恭しく受け取ったセルシオーネは、立ち上がり軽く振るってから鞘に戻した。

「かくして、この身のすべては主君のもの、主君の剣となりました。わたくしの主君は天上天下にあなた独りだ」

このときウッドは気づかなかったが、見守った重臣たちはみな悟っていた。

セルシオーネがこのたびの敗戦の責任を取り、殉死する覚悟を決めたのだということ。だから、みな厳かな表情で見守った。

「今後の段取りなどございますれば、少々時間を貰えませんか？」

「ああ、構わないよ」

ウッドは気楽に応じた。

「では、後程、私室のほうに伺います」

そう言い残したセルシオーネは肩をそびやかして退出し、軍議は解散となった。

もはや降伏が決まった城に攻撃はない。

武士道とか、騎士道といわれる戦場における礼儀作法といえは情緒的だが、実際のところ勝者は、この城を再利用するのだ。破損箇所は少ないほどいいし、人もまた財産だ。殺すより生かして利用したほうがいい。

静かな夜だった。祭りの後のような寂しさの中、ウッドというか、ダードリーの私室にセルシオーネは颯爽たる装いで訪れる。

「まずは礼をいう。おまえのおかげで、サラミス家の名誉は救われるだろう。少なくとも、領主が戦を前に、自己の一身の安全をはかって逃亡したなどという不名誉な記録は残らずに済む」

「役にたったのならなによりだ」

傾くウッドに向かつて、羽根帽子を脱ぎ胸に抱いたセルシオーネは深々と頭を下げた。

「それから、このようにすることに巻き込んで済ませ」

「いまさら謝らないでほしいな。俺はセルシオーネ様のおかげで夢を見ることができた」  
恐縮するウッドを、セルシオーネは制する。

「さまは、やめてもらおう。あなたはわたくしの剣の主だ」  
「しかし」

「ぜひに呼び捨てにしていきたいだ」

人前では領主ダードリーとして振る舞うために呼び捨てにしていたが、人目がないところでは、さまづけでへりくだることを当たり前としていた、ウツドはいささか戸惑う。

しかし、その有無を言わさぬ迫力に負けて妥協する。

「えーと、それじゃ、セルシオーネのおかげで、俺は夢を見られたんだ。感謝している」  
「……夢ですか」

セルシオーネは感慨深く遠い目をする。ウツドは晴れ晴れとした顔で頷く。

「俺は口の端に乗せるのも卑しい身分の男だ。セルシオーネに拾ってもらわなければ、拷問死させられていたんだ。それが城に一室を与えてもらい、衣食住に不自由しない生活を提供してくれた。おかげで、生まれて初めて勉強というものをすることもできた。俺にとつて、城での生活なんて夢でも想像できない世界だった。こんな生活を送らせてくれた、本物のダードリー様にも感謝している。これは本当の気持ちだよ。だから、身代わりとなつて死んでも悔いはないんだ」

ウツドの言い分に、セルシオーネは首を横に振るつた。

「夢という意味でなら、わたくしのほうこそ良い夢を未せてもらった。良き主君のもと、大敵と戦う。まさに騎士の本懐だからな。この十日間、苦しかったが、楽しかった。力及ばず、このような仕儀と相成つたが……」

「……結局、負けちゃつたのは残念だったね」

「仕方がない。いや、仕方がないでは済まされないのだが、もし本物のダードリーがいたとしても、ここまでの奮闘はできなかった。それは断言できる」

セルシオーネの言葉に、ウッドは笑う。

「そう言ってもらえると心が少しだけ晴れるよ。しかし、せっかく奮闘してくれたみんなになにも報いてあげられないのは心苦しいな」

「そう思うのなら、最後まで戦った者たちに感状を書いてやってもらいたい。それがあれば、騎士として新たな主君を得るとき有利に働く。また主取りをせずとも、子孫への自慢になる」

「わかった。すぐに手配しよう」

出ていこうとするウッドを、セルシオーネは止めた。

「お待ちください。それは明日でもよろしいでしょう。それよりも」

「なに？」

赤面したセルシオーネは、左手で右手の肘を抱き、軍服に包まれた乳房を下から持ち上げるような姿で、言いづらそうに続ける。

「このような形でしか、恩に報いることのできぬ身を恥ずかしく思うのだが……くー、そのだから、その……なんだ、我が忠義の証として、我が純潔を奪ってもらいたい」

「え？」

意味を図りかねているウッドの顔を見て、セルシオーネは慌てたように早口でまくした

てる。

「そ、そう意外そうな顔をするな。ちゃんと先ほど、この身のすべてを捧げる。純潔も捧げると契約したぞ。おまえも了承したではないか」

「ええええ!!! あれって、そういう意味だったの?」

驚くウッドの前に、真っ赤になった顔をそむけたセルシオーネは、巻き毛の頭髪を意味もなく掻き上げながら横目で睨んでくる。

「この身体では不満か?」

「いや、不満というか、なんというか……」

「たしかに筋肉質な身体であることは認めるが、女として決して醜くはないと自負するところである。特におっぱいに関していえば、大きき形ともに水準以上なのではないかと思っている。だから、主君の最後の女の役を務めさせてほしい」

水準以上どころか、極上の乳房であることは、軍服の上からでも十二分に予想することはできる。

「忠義で貞操って……」

「心から忠誠を誓った主君に純潔を捧げるのは、女騎士の誉れなのだ。頼む、わたくしに情けをくれ」

こう懇願されては、男として逃げられない。

頬を指で掻きながら思案したウッドは一步進み出て、セルシオーネの肩を抱いた。

「俺はそれほどものかな？」

「ああ、我が主君……」

二人の目が正対する。青い瞳に吸い込まれるようにして、ウッドはごく自然とセルシオーネと唇を重ねた。

「う、うう……」

セルシオーネもまた、ウッドの肩を抱き、積極的に唇を重ねる。

（セルシオーネとこのように逢瀬をするなんてな……ほんと夢みたいだ）

出会ったときには想像もできなかったことだ。

ウッドは両手を伸ばすと、セルシオーネの腰を抱き、むっちりとした尻を鷺掴みにした。ビクンっ！

セルシオーネの身体が震える。

ウッドの胸板に、充実感のある肉の塊が押し付けられた。同時に男の昂りが、女の股間に存在感を誇示している。

「うう……」

ウッドは舌を伸ばし、セルシオーネの唇を舐めた。

セルシオーネは素直に口を開く。そこで前歯を舐めると、さらに口を開いたセルシオーネは舌を絡めてきた。

ピチャピチャピチャ……。

偽りの主従関係で結ばれていることを承知している二人は、真実の絆を築こうと夢中になつて接吻する。

「ふう……」

長い接吻を終えて男女が口を離すと、いつもは剣のように硬いセルシオーネの顔がトロリと蕩けていた。

(あ、セルシオーネが女の顔になつた)

サラミスを守る重責をその双肩に宿した女騎士は、ようやくその重責から解放されたというかのように、主君の、いや、男の胸に縋る。

ウッドはいたわるように羽根付き帽子からこぼれる巻き毛を撫でてやりながら口を開く。「寝台に行こうか？」

「……はい」

まるで初夜の花嫁のようにセルシオーネは、従順に従う。

寝台に仰向けになつたセルシオーネの胸元を、ウッドが開ける。

軍服の下には、水色のブラジャーがされており、それを引きずり下ろすと、巨大な乳房があらわとなる。

本人がいうだけあつて、見事な豊乳であつた。いただきを飾る乳首も大きい。

「綺麗だよ」

優しく褒めたウッドは両手で、セルシオーネの乳房をとつた。

(おお、すげえ弾力)

その採み心地に酔いしれていると、セルシオーネは戸惑ったように口を開く。

「あ、あの……臭わないか？」

「うん、どうしたんだ、急に？」

羽根付き帽子の下で、頬を赤くしたセルシオーネは言いづらそうに告白する。

「ほ、本来なら風呂に入ってきたかったのだが、このような情勢下では贅沢はできず、濡れタオルで身体を拭いてきただけなのだ」

女の不安を察したウツドは失笑する。

「美女の汗や体臭を嫌う男なんていないよ」

「美女だなんて、わたくしは奥御殿の女たちのように化粧の仕方も知らぬ……あつ」

なにやらモジモジと言いつけているセルシオーネの、美しい桜色の乳首をウツドは口に含だ。

チュウチュウとしゃぶっていると、口内で乳首はたちまちのうちに硬くなった。

「ああ……気持ちいい。こんなに気持ちいいとは……」

歡喜と動揺の声を上げたセルシオーネは羽根帽子で顔を隠し、鏢の下から目だけを覗かせながら嬌声を上げる。

「セルシオーネはこういうことは初めて？」

「ああ。正直に告白すると、わたくしはダードリーの女たちを軽蔑していた。しかし、今

わたくしは喜びに包まれている。敬愛する主君をすべて受け止め、そして、受け入れたい」セルシオーネの懇願の意味を察したウッドは、いったん乳房から手を放し、彼女の腰のベルトを解いて、ぴつたりとした白いズボンを引きずり下ろす。

中から水色のブーメラン型のシンプルなショーツがあらわたくなる。

ショーツの股間部分が卵でも隠しているかのようにぷっくりと膨らんでおり、縦長の沁みができていた。

(へえ、セルシオーネのような女性でも濡れるんだねえ)

生まれ故郷のために尽くすセルシオーネは、立派だと思っただけだったが、どこか非人間的に感じていたウッドは、生身の女だということを改めて実感して嬉しくなる。

そこで右手を腹部からショーツの中に入れた。

「あっ」

羞恥に顔を染めるセルシオーネのふわふわの陰毛を櫛削る。

(頭髮と同じで陰毛も豊かなんだな)

そのしなやかな陰毛をかき分けて、陰唇を人差し指と中指と薬指で蓋をする。そして、激しくこすりたててやった。

同時に左で、豊麗な乳房を揉みしだく。

赤い乳首は、両方ともニョキッと鬼の角のように突起し、ショーツの中でも大量の温かい蜜が溢れて、ウッドの指を濡らした。

クチユクチユクチユ……。

卑猥な水音が静かな室内に響き渡る。

「ああ、恥ずかしい。恥ずかしいのにすごく気持ちいい♪」

気高き女騎士が、羞恥に悶えるさまは、たまらなく男の嗜虐心を煽る。

「セルシオーネのような立派な騎士様と、こうやって寝屋をともにできるなんて夢みたいですよ」

「わたくしは立派な騎士なのではない。ただの敗軍の将だ。それなのに、主君のお情けを媚びずにはいられぬ、駄目な女だ」

「駄目なんかじゃない。セルシオーネはやれることは全部やった。だれもセルシオーネを責めないよ。少なくともぼくは感謝しかない」

ウッドの右手の中指に、コリツとした突起が引っ掛かった。

「はぁん♪」

セルシオーネは背筋を弓なりに反らした。

(クリトリス、意外と大きい)

発見してしまった女の急所を、ウッドは右手の親指と中指で摘まんで、集中的にこね回した。

同時に左手で右の乳首を摘まみ、左の乳首を口に含んで吸引しつつ、舌ではじきまわす。「あ、これは、ひい、す、すごい、いい、ひい、ひい、ひい、ひい、ひい、ひい、ひい」



気高き女騎士は、三点責めを食らってすすり泣くような嬌声を漏らしていたが、やがて腰を大きく上げて、痙攣を始めた。

「ああ——!!!」

大きく口唇をあげたセルシオーネは、綺麗な歯並とともに、その奥の喉ちんこまで晒すという、およそ普段の取り澄ました表情からは想像できない、淫らな表情で悶絶した。

ウッドが手を放してやると、セルシオーネは羽根帽子で顔を隠した。

「どうやら、いったみたいですね」

「ああ、おそらくこれがイクということだな。噂には聞いていたが、惚れた男にイカされるといのは、とんでもなく恥ずかしく、それでいて嬉しいものなのだな」

「喜んでいただけで幸いだ。なら、そろそろ帽子をとって顔を見せてください」

ウッドに促されたセルシオーネは、恐る恐る帽子を下ろして、目を見せる。

あまりにも恥ずかしがるものだから、ウッドはつい嗜虐心を晒されてしまい、その眼前に右手の指を翳してしまった。

「っ!？」

親指と中指の間には、トローとした半透明の粘液が意図を引いていた。

「いい濡れっぷりです」

嘲弄されたセルシオーネは、慌てて真っ赤な頬を帽子で隠しながら叫ぶ。

「い、意外とおぬし、いじわるだな」

「うふふ、不思議な感じだわ。あなたとこういうふうに話す日がくるなんて」

「それは俺も同じ気分だよ」

ウッドは肩を竦める。

カメラアと普通の恋人というか、まるで夫婦のように会話し、それを周りに認められて  
いるという環境がなんともむず痒い。

「ねえ、すごい汗かいたみたいだし、よかったら椿亭に寄ってかない？」

「え、いや、あそこは……」

浮浪者時代のウッドを見知っている人が大勢いる。

その懸念を察したカメラアは、艶やかに笑う。

「大丈夫よ。ばれやしないって。そんなことよりあんた、玄関から客として入ったことが  
ないんでしょ？ あたしも実家に顔見せたいし。ひとつぶろ浴びてから帰りましょう」

カメラアはウッドの腕を引くと、椿亭に出向いた。

「いらっしやいませ」

従業員一同が整列して、頭を下げてくれる。

「ご領主様に来館いただき、光栄です」

「お、おう」

さすがに老舗旅館、みな教育が行き届いている。おそらく彼らも先の籠城戦に義勇軍と

して徴兵されて参加し、激励してまわるウッド、いや、ダードリーを見ていたのだろう。

「お嬢様、お帰りなさい」

「ただいま」

ウッドと腕を組みながら応じるカメラリアは明るく挨拶する。

「お嬢、領主様のところに行くの、あんなに嫌がっていたのに、ラブラブじゃないですか？」

「うふふ、まあね。男は女次第でいかようにも変えることができるのよ」

赤紫の長髪を払ったカメラリアは、得意げに応じる。

カメラリアの両親や兄弟姉妹と思える方々もでてきて、幸せそうなカメラリアの姿に涙ぐんでいた。

「はいはい、ごちそうさま」

笑う従業員の中には、ウッドも見知っている顔がいくつもある。

そのいづれもが、まさかわずか一ヶ月前まで、風呂掃除に安く使っていた浮浪者同然の男が、領主となって戻ってきたなどは夢にも想像できないでいる。

「うふふ♪」

悪戯成功といった気分で、ウッドとカメラリアは思わず目くばせして、笑いあってしまった。

そんな様子は、まさにラブラブカップルといった雰囲気です。椿亭の従業員たちは微笑ましくそうだ。みなニコニコしている。

「あたしの好きな部屋空いているわよね」

「はい」

裸になったウッドとカメラアは、仲良く温泉に入った。

カメラアはごく当たり前に、ウッドに背を預けてきたので、ウッドのほうとしても、当たり前両手を腋の下から入れて、大きな乳房を手に包む。

温泉効果だろう。肌にぬめりがある。

（彼女との出会いが、すべての始まりだったよなあ）

抱き心地のいい乳房の感触を楽しみつつ、感慨に耽らざるを得ない。

「カメラアが、裸で入ってきたのを見たときはびっくりしたなあ」

「あときはあたしも自棄になっていたからね」

赤面して言い訳するカメラアの乳首を摘まんで、こりこりに勃起させてやりながら、その耳元でからかってやる。

「カメラアにおしっこをぶっかけられた」

「やめて。あたしがすごい変態女みたいじゃない」

顔を赤くしたままカメラアは断固として否定する。カメラアにとっては忘却したい過去のようだ。

そんなさまが妙にかわいく感じて、さらにからかってやる。

「あれ、カメラアって男におしっこかけるのが好きな特殊な性癖の持ち主だと思ったけど、

「違ったの？」

「違うに決まっているでしょ！」

ムキになって否定するカメラリアの股間に手を入れて、尿道あたりを探ってやる。

「またカメラリアのおしっこしているところ見たいな」

「イヤよ。絶対にイヤ」

「そんなこと言わないでさ。一回だけ、一回だけでいいからさ」

断固拒絶するカメラリアの乳房や股間を弄りつつ、ウッドはしつこくお願いした。やがて眉を寄せた困った表情になったカメラリアは、折れてきた。

「い、一回だよ……」

「うん」

「これが最後だからね。城ではやらないからね。ここならあんたしかいないから、特別よ。何度も今回だけ、と念を押しながらも、カメラリアは了承してくれた。

「それじゃ、そのままうつ伏せになって、お尻だけ高く翳しておしっこしてみてください」

「そ、そんな恰好で出ないわよ」

「いいからいいから」

ウッドに無理やりうつ伏せにされたカメラリアは、温泉の縁に両手を預けて、むっちりとした尻を高く翳す。

背後に陣取ったウッドの位置からは、赤紫の肛門から紅色の陰唇まで丸見えだ。

「ちよ、ちよっと、やっぱり無理、恥ずかしすぎる」

「なんで前に一回やってるじゃん」

「あのときは違うわよ。好きな男の前でおしっこだなんて」

その告白がウッドにはいささか意外だったので、両手で陰唇を開き、尿道口を晒させながら確認してしまう。

「カメラア、そんなにぼくのこと好きだったの？」

「悪い？ 城に上がったとき、すごい不安で悔しくて、ほんと自殺したかった。そんなときあんたの顔を見てびっくりすると同時にほっとしたの。あんたがいろいろ頑張っているのを見ていたから、あたしも頑張らなくちゃって思っ、頑張れた。あんたがいなかったら耐えられなかったと思う」

カメラアがそんな風に思っ、城での生活を送っていたなどと露も知らなかったウッドは、心が温かくなる。

カメラアは頬を染めながらさらに告白する。

「偶然とはいえ、あんたに処女をあげられたしね」

「あ、そうだね。あのときの刺身も美味しかった。またカメラアの味の付いたお刺身食べたいな」

「へ、変態！」

美尻を翳した状態で、カメラアは叫ぶ。

「それから、あんた勘違いしているかもしれないから、一応、言っておくけど。あたし、あんたにやられただけで、それ以後、やられてないからね。イーシャたちが氣遣ってくれたの。別にやりたくないなら、やらなくていいよって」

「そ、そうなんだ」

ダードリーとウッドが入れ替わり遊びをしてから、戦が始まるまで、一日かそこらしか猶予はなかった。だから、そういうこともあり得るのかもしれない。

それで喜ぶというのも、男として器量が小さい気がして、ウッドは頬を引き締める。

「あ、そんなことより、そろそろおしっこ出るんじゃない？ オマ○コ、ヒクヒクしてるよ」

「ああ、もうほんと今回で最後よ。二度とこんなことしないからね、あ」

惚れた男に懇願されると、どんなに気の強い女でも、弱いものらしい。カメラリアは諦めて尿道を緩めたようだ。

チヨロ……シヤ——。

湯にうつ伏せになり、高く翳された美尻の狭間から、勢いよく液体が噴出した。

温泉の硫黄にかき消されていることもあるのだろうか、まったく生々しい匂いはしない。

「うわ、噴水みたいで綺麗だよ」

その温かい液体を、ウッドは両手で掬って受け止めた。

「もう、この・へ・ん・た・い。こんなの恥ずかしすぎる」

とカメラリアが被虐に身悶えているときだ。ガラガラガラと温泉の扉が開いて、イーシャが顔を出した。

「うわ、やっているとは思ったけど、予想以上にすごい変態ちつくなことしているしー」さらにメイド長のフィンナンシェが真面目な顔で論評する。

「男におしっこを浴びせるのが好きとは、またマニアックな性癖ですね」

「こ、これは違うの!!! こいつに言われたから仕方なく……」

動揺したカメラリアは必死に尿道を閉めようとしたようだが、止まらない。尿道に入った液体が膀胱に逆流することはないので、一度始まってしまった放尿は、出し切るまで止まらないのだ。

（うわ、恥辱と後悔に震えているカメラリアの姿、すっげえかわいい♪）

興奮したウツドは、カメラリアの放尿が止まるのを待ち切れず、そのパンツと張り詰めた尻を抱き寄せると、逸物を押し込んでしまった。

「あ……あん♪」

ズボリ!

生涯二度目の挿入。もはや破瓜の傷跡も癒えたのだろう。カメラリアは歓喜の表情で惚けてしまった。

「ちょ、ちよつと、お湯が入っちゃって、ああ、駄目……」

ウツドは満々と張り詰めた乳房を揉みしだきながら、入口の二人に声をかける。

「どうしてここにいてるってわかったの？」

イーシャが軽く片目をつぶる。

「二人がそつとしけこんだのを見つけたからね。ついてきたんだよ」

町の復興のためにウッドが率先して働いているくらいだ。

侍女たちも駆り出されていた。力仕事はできなくとも、飯を運んだり、怪我人の手当てをしたり、女性だからこそ喜ばれる仕事は多い。

「ご主人様、我々も参加したいのですが、よろしいですか？」

「つて、もう脱ぎだしているね」

ウッドが指摘すると、あつという間に素っ裸になったフィンシエは左右にパンツと張つた腰をクネクネと動かしながら言い訳する。

「わたくし、服を着ていると落ち着かなくて」

「あ、そ、そうなんだ」

ほんとこのメイド長は根っからの裸族のようだ。

「いいよ、おいで」

ウッドが手招きをすると、メイド二人は温泉に入り、ウッドの左右から抱きつき、乳房を顔に押し付けてくる。

同時に二人とも湯の中で膝立ちとなり、股の間に男の腰骨を挟み、スリスリと陰毛をこすり付けてくる。

こういうことがサラリとできるあたり、まさに調教済みの女たちの良さだろう。

「領主様〜♪ そんな変態女はとつとと終わらせて、うちの中に欲しいな〜」

「わたくしも、もう我慢できません〜」

「あはは、もう少し待ってね」

カメラアの身体だけでも、十分すぎるほどに食べ応えがあるというのに、さらなる食べ応えたつぷりの女たちに挟まれて、ウッドは陶然となってしまう。

そこにカメラアの抗議の声が聞こえてきた。

「ちよつと、なに人を変態女認定しているのよ」

そこにイーシャが応じる。

「男に放尿姿を見られて、エッチーな気分には浸っている女を、世間ではへ・ん・た・いつて言うんだよ〜」

「そんなんじゃないわよ、お願いされたからしただけで……ああ、もう自棄だ。あたしから動くからね」

「お、おう」

カメラアの剣幕に負けて、ウッドは許可する。

「まったく、せっかく二人つきりでいろいろとやってあげようと思ったのに……」

なにやら不満そうにぶつぶつ言いながらも、長い両足を左右に豪快に開いたカメラアは、腰をしなやかに動かし始めた。



「おお」

キュッキュツと締まる膣穴で逸物を振り回される。それを見下ろしたイーシャは悪戯っぽく笑う。

「あれ、カメラアってば、意外と腰使い上手いんやね。さては、独りで練習していたな」  
♪

「後宮にあがる女は、多かれ少なかれ、自分でエッチな技を磨きますからね」  
したり顔のフィンアンシエも頷く。

「ああ、そうよ。あんたのために勉強したんだから、せいぜい楽しみなさい」  
自棄を起こして認めたカメラアは、さらに激しく腰を使う。

グチュグチュグチュ……。

カメラアの膣洞は、キュッキュツとよく締まり、普通に入れていただけでも十二分に気持ちいいのだが、温泉のぬめりが混じって一段と具合がよくなっているようだ。

「ああ、カメラアのオマ○コ、最高だ。おちんぼ蕩けそうだ」

前回、カメラアの処女を奪ったとき、ダードリーに化けており、自分なんかやっついていいのか、という罪悪感があった。しかし、今はカメラアが、本当に自分のことを見てくれているのだと知ってたまらない気分になる。

「くっ」

まさに極楽。射精したくなるのを必死に我慢しているところに、再び温泉の出入り口が

開いた。

「殿、こんなところにいたんですか！」

羽根帽子をかぶり、簡易な冑を纏ったセルシオーネがいた。

「警備の問題もありますから、いきなり消えるのはやめていただきたい」

「あ、そうだね。ごめん」

ウッドは素直に謝罪する。

セルシオーネは温泉の惨状を見て、重々しく溜息をつく。

「まったく、殿の好きには困ったものです」

ぶんぶん怒りながら、セルシオーネは服を脱ぎだした。

「セルシオーネも参加するの？」

「わたくしは殿の剣ですから。剣は主人に定期的に手入れをされてこそ、本来の力を発揮

します。いけませんか？」

「いや、構わないよ。こっちにきて」

ウッドが促すと、豊乳を晒したセルシオーネは莞爾と笑う。

「はい。では、失礼します」

湯船に入った、セルシオーネはカメラリアの左脇に立ち、ウッドの顔を正面から捉えると、

接吻してきた。

「う、うむ、うむ……」

唇をこすり合わせ、舌を絡ませる。

（はあ、セルシオーネと出会わなければ、今のぼくはないんだよな。彼女と牢で出会ったとき、こんな関係になるなんて、夢にも思わなかった）

そこにさらに三度目、温泉の扉が開いた。

ガラガラ……！

勢いよく扉が横開きになったと思うと、肩で息をしているマルガリータが仁王立ちしている。

「はあ、はあ、はあ……主殿、正室たるわらわに隠れて、このようなところでしつぽり楽しんでむとは許せぬぞえ」

どうやらよほど急いできたらしい。肩で息をしている。

「うわ、マルガリータ。よくここがわかったね」

「わらわの情報収集能力を舐めるでないぞえ」

マルガリータの背後には、女忍者のような従士たちが従っている。

どうやら注進に参じた部下がいるらしい。

「ほんに女の戦いに油断も隙も無いの」

「正室は嫉妬しないんじゃないの？」

「嫉妬はせぬが、おちんちんを巡って争うのは女のサガぞえ。正室たるわらわを差し置いて、温泉でしつぽりなんて許せませんのじゃ」

そう言い捨てたマルガリータは、部下に手伝ってもらいながら、赤い衣装を脱ぐ。スレンダーなのに、乳房だけ異様に大きいという、どこか人形めいた完璧な裸体があらわとなる。

「おお、綺麗……っ！」

その非動物めいた均整美に、イーシャも思わず感動の声を上げる。

ダードリーの女として、いろいろな女性の裸を見ていたイーシャからしても、マルガリータの美しさは別格に映るらしい。

裸となったマルガリータは、温泉に入ってきたが、ダードリーの身体にはすでに大勢の女性がとりついている。

「えーと、こういうときはどうしたらよいのじゃ、んー、とりあえず、どうぞえ」

ウッドの身体の中で、現在空いているのは背中だけ、と見て取ったマルガリータは、ウッドの背後に回ると、自慢の乳房を押し付けてきた。

（くっ、全身が女性で包まれてしまった……）

右にフィンアンシエ、左にイーシャ、前にセルシオーネ、後ろにマルガリータ。そして、逸物はカメラリアの体内で激しく振り回されている。

「く、ああ、出る」

温かい温泉に浸かりつつ、柔らかい女体に包まれて、ウッドは心地よく欲望をぶちまけた。

「ああ、すごい、ああ、なか、なか、なか、なか、ああ〜ん」

腔内射精された気持ちよさに、カメリアはぐったりと脱力する。

「はあ〜、滅茶苦茶気持ちいい〜。おちんぼの奴隷ってこういう風にしてできるんだ〜…」

湯から出たプリップリの尻の狭間から白い煮汁が溢れている。

一方で、ウツドの逸物は、フィンランシェとイーシャとセルシオーネとマルガリータの猟犬のような眼光に晒されていた。

「すごい、絶倫だね」

「ごくり、わたくしはもう準備万端ですわ」

「ここはわたくしが」

「いいえ、わらわの番じゃ」

四人の手が逸物を掴んでくる。

「はは、だれからにしようか？」

だれにやっても角が立つ。最終的には四人全員とやらないと解放してくれそうもない。なんとも幸せな苦悩だ。

その間に、マルガリータが前に回って、左足を湯面より高く翳して挑発する。

「では、正室たる権限をもってわらわがいたただこうかや」

「あ、こういうときに権力を振り回すことはんたーい」

すかさずイーシャが右手を上げて抗議する。

「そうだね。マルガリータ、それはマナー違反だ」

ウッドがたしなめると、マルガリータは片足を高く翳したまま当たり前に応じる。

「後宮の作法はわらわも心得ておるぞえ。裸となったとき、正室も愛人もない。女としての器量だけがものをいうのじゃったな。しかし、それならばわらわほどの器量の良い女はいるかや？」

「カチーン！ 言いましたね。雑草魂を見せてあげます」

大いに敵愾心を刺激されたらしいイーシャの両目がキラーンと輝く。

(あちゃー、挑発していけない子を挑発しちゃったね。しーらない)

内心で苦笑したウッドは、イーシャに目顔で確認をとつてから、マルガリータの膣穴に、逸物を入れた。

「あん、いいですわ。わらわの身体にこのおちんちんはぴったり合いますわ。さすが生まれながらの許嫁。理想の夫婦と申せますわ」

高く翳した左足がプルプルと震えている。俗にいう横位での挿入だ。

細身なのに巨乳という、人形じみた美貌を誇るマルガリータは、膣洞も狭くて、褻が複雑に絡まる。

その心地よい入れ心地を堪能していると、イーシャが矢継ぎ早に指示を出す。

「メイド長はおっぱいを、セルシオーネさんはクリトリスをお願いします。領主様はガン

ガン突いちゃってください」

「な、なんですの!!」

イーシャの指示に従って、フィナンシエは乳房を、セルシオーネは結合部に顔を近づけて、指と舌で悪戯を始めた。

「はあ、ああん。らめえええ、ちんちんだけですつごく気持ちいいのにいい、そんなことされたら、ああん♪ 気持ちいい♪ 気持ちいい♪ 気持ちいい♪」

「うふふ、いくらやんごとなき身分のお姫様とはいえ、それやられると理性が飛ぶんやない。そして、トドメや♪」

イーシャは、ウツドから見て右手。マルガリータの背中側に回ると、小さいが真珠のように輝く尻を割って、中からあらわとなった菊華に、中指を一本押し入れた。

「はぐううううううう!!!」

思いもかけなかった刺激に、マルガリータは大口をあけて、涎を拭く。

「おちんぼ入れられた状態で、アナルに指を入れられた気分はどうかなあー?」

「ひい、いや、めええ、めええ!!!」

マルガリータは口の歯が合わないらしく、まともな返事ができない。

「あらあら、良すぎて返事ができないみたいやねー。領主様、ガンガンやって牝に墮としちゃいましよう」

「お、おう」

イーシャの指示通り、ウッドは荒々しく腰を振る。

「ひいん、いや、いい、すごくいい、いい、いい、いい、……良すぎておかしくなっちゃう」

逸物がズゴズコと最深部をえぐるだけでなく、両の乳房はフィナンシエに責められ、陰核部分はセルシオーネに責められ、さらにイーシャに肛門をえぐられているのだ。

マルガリータは完全に理性が崩壊してしまっている。両目が白目を剥いてしまっているのはもちろん、大口あけた口元からはだらしなく舌を出し、聞くに耐えない牝声を上げている。

「くっくっくっ……高貴な王女様といっても、おちんぼの前にはただの牝やねー」

得意げなイーシャを横目に見つつ、絶頂の余韻に浸っていたカメラリアが、軽くウッドに抱きつきながら戦慄した顔で呟く。

「恐れを知らないというか、イーシャ、恐ろしい子……」

「たしかに最強だね」

ウッドも全面的に認めた。

「くっ、それじゃ、そろそろ俺も出すよ」

「ああ、来ますの、来ますのね、ああ、来ましたわ」

「くっ」

どびゅ！ どびゅっ！ どびゅびゅっ!!!



「ああああ〜ん」

高く翳した左足をピクピク痙攣させながら、マルガリータは絶頂した。

と同時に、セルシオーネの顔に、ぴゅっとお湯がかかった。

「っ!？」

それをイーシャが目ざとく見つけてからかう。

「うわ、マルガリータ様っていきながら、おしっこ漏らしちゃう体質なんだ。尿道短いですねー」

「あう……」

さすがの傲慢なお姫様は、羞恥心に耐えられないらしく、顔を真っ赤にして大人しくなってしまう。

「さて次は……」

舌なめずりをしたイーシャがあたりを窺う。

「わ、わたくしは……今日はいいかな……」

どうやら、イーシャと一緒にエッチするとうるくな目にあわないと悟ったらしく、セルシオーネは逃げ腰である。

「えー、うち、昔からセルシオーネ様のおっぱい触ってみたかったんやけどなあ」

「いや、わたくしのおっぱいなんて触っても面白くないわよ」

「そ、そうだな。もうのぼせてきたし、上がるか」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 盗作リムをルルは、生満の方購入できずせん。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!